

第30回記念 くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート
ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト Vol.6
～藝大の精銳たちのベートーヴェン～

東京藝大 シンフォニーオーケストラ



2016年11月13日(日) 午後2時開演
一橋大学兼松講堂

主催:ボランティアチーム如水コンサート企画 特別協賛:(公財)くにたち文化・スポーツ振興財団
後援:(社)如水会・新三木会・国立市・国立市教育委員会・国立市社会福祉協議会・国立市商工会・国立市観光まちづくり協会・
国立市商業協同組合・国立商工振興(株)・国際ソロブチミストくにたち
協力:一橋大学管弦楽団・「Café ここたの」(一橋大まちづくりサークル)

ご挨拶

「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」は、兼松講堂が創建以来77年ぶりに大改修された翌2005年から始まり、今回、お陰さまで第30回目を迎えました。皆さまのご支援を心から感謝申し上げます。

月並みの名曲コンサートではなく、大学の講堂での演奏会に相応しいテーマを掲げたコンサートを目指していますが、その1つが2012年からスタートした『ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト・シリーズ』です。また、日頃聴く機会の少ない主要音楽大学のオーケストラをこのシリーズに順次お招きする計画も進行しております。

今回は本シリーズ第6回目。3年前の「桐朋学園オーケストラ」に次いで、「東京藝大シンフォニーオーケストラ」をお招きし、本年4月、第10代藝大学長に就任された澤和樹先生の指揮のもと、若きベートーヴェンの2曲の傑作を中心に、藝大の精銳の皆さんに演奏していただきます。

ベートーヴェンは、ハイドン、モーツアルトなどのウィーン古典派音楽を継承し発展させる過程で、〈初期〉・〈中期〉・〈後期〉で自らの作風を驚くほど大きく変貌させていますが、本日の2曲の『第3番』は、楽聖の作曲活動における〈初期〉と〈中期〉の“結節点”に位置する重要な曲であるといえましょう。

本日のコンサートのご案内役として、『ピアノ協奏曲の誕生—19世紀ヴィルトゥオーソ音楽史』のご著書もある小岩信治先生(一橋大学大学院言語社会研究科教授)にナヴィゲーター役をお願いしたところ、快くお引き受け頂きました。厚く御礼申し上げます。

本公司にあたり、(公財)くにたち・文化スポーツ振興財団の特別協賛と、スタインウェイ・ジャパン株式会社や地域の有名店各社のご賛助を頂いております。変わらぬご支援に感謝申し上げます。

なお、当講堂は歴史的建造物(政府登録有形文化財)でもあり何かとご不便をおかけいたしますが、このホールのもつ自然な響きの中で、どうぞ最後までごゆっくりお楽しみ頂ければ幸いでございます。

ボランティアチーム 如水コンサート企画

Program

モーツアルト(1756~1791) 歌劇「フィガロの結婚」序曲 K.492 (1785~86)

ベートーヴェン(1770~1827)

ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 Op.37 (1796~1803)

- I. Allegro con brio
- II. Largo
- III. Rondo (Allegro)

～～～ 休憩 20分 ～～～

交響曲 第3番 変ホ長調 Op.55 「英雄」 (1803)

- I. Allegro con brio
- II. 葬送行進曲 (Adagio assai)
- III. Scherzo (Allegro)
- IV. Finale (Allegro molto)



Profile

東京藝大シンフォニーオーケストラ Tokyo Geidai Symphony Orchestra

東京藝大シンフォニーオーケストラは、音楽学部の2～4年までの弦・管・打楽器専攻生を主体として編成され、古典から現代までのオーケストラ作品（管弦楽曲・協奏曲・オペラ等）を中心に学び、授業の成果を学内外で発表している。これまでに毎年行われる伊澤修二記念音楽祭や日本国際賞授賞式記念演奏会、別府アルゲリッチ音楽祭等に招待され高い評価を得てきた。

また、近年では外国人客演指揮者を迎えての演奏会も積極的に行い、これまでネルロ・サンティ、ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー、クルト・マズア、ハンス=マルティン・シュナイト、ペーター・チャバ、ドミトリー・シトコヴェツキー、ヨルト・ナジ、ダグラス・ボストックの各氏のほか、多数の共演を果たしている。

澤 和樹 (指揮) Kazuki Sawa (Conductor)



4歳よりヴァイオリンを始める。1979年、東京藝大大学院修了。「安宅賞」受賞。ロン=ティー・ボー、ヴィエニアフスキ、ミュンヘンなどの国際コンクールに入賞。イザイ・メダル、ボルドー音楽祭金メダル受賞などヴァイオリニストとして国際的に活躍。'80年より文化庁在外研修員としてロンドンに派遣され、ジョージ・パウク、ベラ・カトーナ両氏に師事。'84年に東京藝大に迎えられるとともに本格的な演奏活動を開始。'89年には、文部省在外研究員としてロンドンの王立音楽院に派遣され、さらに研鑽を重ねた。この時期、アマデウス弦楽四重奏団メンバーとの出会いにより澤クワルテットの結成を決意する。'96年より指揮活動を開始。2003年、'04年には響ホール室内合奏団、'05年には東京弦楽合奏団を率いて英国各地で演奏し絶賛される。九州交響楽団、東京フィル、日本フィル、札幌交響楽団、紀尾井シンフォニエッタ等にも客演し、好評を博す。2004年、和歌山県文化賞受賞。

東京藝大音楽学部教授、音楽学部長を経て、2016年4月より東京藝大学長。英國王立音楽院名誉教授。英國北王立音楽院学術特別研究員。響ホール室内合奏団ミュージックアドバイザー。千里フィルハーモニア・大阪常任指揮者。

迫 昭嘉 (ピアノ) Akiyoshi Sako (Piano)



© 武藤章

東京藝大及び同大学院、ミュンヘン音大マイスタークラス修了。ジュネーヴ国際音楽コンクール最高位、東京国際音楽コンクール室内楽部門優勝（1980）、ハエン国際ピアノコンクール優勝およびスペイン音楽賞（1983）、ABC国際音楽賞受賞（1998）。

デビュー以来、気品ある音色と透明度の高いリリシズムを持つピアニストとして、日本はもとより海外でもソロ、オーケストラとの共演のほか、室内楽奏者としても高い評価と信頼を得てきた。『迫 昭嘉・ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ全集』（2001）は、各方面から名演奏の呼び声が高い。

一方で、指揮者としての活躍も目覚ましく、1999年九州交響楽団でデビュー以来、東京シティフィル、都響、新日本フィルなどの指揮台にも登場、緻密な音楽作りが話題となり今後の動向が注目されている。

現在、東京藝大教授・音楽学部長。東京音大客員教授、洗足学園音大客員教授として後進の指導にも当たっている。

小岩 信治 (ナビゲーター) Shinji Koiwa (Navigator)



一橋大学大学院言語社会研究科教授。博士（Dr. phil., ベルリン芸術大学）。19世紀のピアノ文化史を中心に研究。著書に『ピアノ協奏曲の誕生—19世紀ヴィルトゥオーソ音楽史』（春秋社、2012）、共著書に『ピアノを弾く身体』のほか、論文「時空を超えた『デビュー用』ピアノ協奏曲—東京音楽学校におけるフンメルの《協奏曲》イ短調、作品八五」など。

静岡文化芸術大准教授として、三枝成彰総監修のもと、同大学生が企画・運営し鍵盤楽器のコンサートや講演を2日間に80公演開催する音楽祭「バンバン！ケンバン♪はままつ」を監修（2012）。

2013年に一橋大に着任後、大学院生とともに本邦の音楽文化への貢献に対して毎年「四十雀賞」を授与する活動などを通じて、文化政策、音楽産業などを含めた多様な視点からの音楽文化の考察を試みている。2014～16年の科学研究費補助金（科研費）プロジェクト「20世紀序盤の本邦における和洋の共鳴—楽器の響きから考えるピアノ文化」研究代表者として、明治・大正期に日本に存在したピアノの調査も実施している。

Program Note

モーツアルト：歌劇「フィガロの結婚」序曲 K.492 (1785～86)

音楽のあらゆるジャンルで数々の傑作を書いているモーツアルトだが、オペラにおいても20数作品残しており、とりわけ彼の晩年に作られた『フィガロの結婚』(1786)、『ドン・ジョヴァンニ』(1787)、『コシ・ファン・トゥッテ(女はみんなこうしたもの)』(1790)、『魔笛』(1791)は、同時代の他の作曲家の諸作品が上演後は殆ど忘れ去られているのに対し、今日に至るまで世界各地で絶えず上演され続けている。

オペラの序曲といえば、劇中の印象的な旋律を織り込んだ、いわば“予告編”的趣があるが、モーツアルトの時代にはそこまで“進化”はしておらず、劇の筋書きとは関係のない、開幕前の“バックグラウンド・ミュージック”的趣があった。当時、オペラハウスは社交場でもあり、演奏が始まてもざわめいていて、それを鎮める効果もあったようだ。

『フィガロの結婚』序曲もその例外ではないが、プレストの軽快な序曲は、強弱と推進力に溢れ、その心浮き立つような主題と共に、このオペラの雰囲気を実に的確に表している。演奏される機会の最も多い序曲であることが頗ける。

ベートーヴェンはモーツアルトの絶筆『レクイエム』を聴いてこう述べている。

「いかなるときも私はモーツアルトの最大の尊敬者の一人と自認してきたが、生涯の最後までそうだろう。」

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 Op.37 (1796～1803)

故郷ボンの選帝侯の若き宮廷楽師として楽才を発揮していたベートーヴェンが、巨匠ハイドンに作曲を師事するため文化の中心地ウィーンに赴いたのは1792年(22歳)。

“ピアニスト”と“作曲家”的二つの顔を持った若い音楽家は、3年後の1795年、ハイドンやモーツアルトを凌ぐ堂々たる4楽章形式の「ピアノ・ソナタ第1～3番」(作品2-1～3)を作曲し、ハイドンに献呈。同時にピアノ協奏曲にも取り組み、その年の3月、ピアノ協奏曲第2番(Op.19)を、同年12月、ピアノ協奏曲第1番(Op.15)を初演し、ピアノの名手として華々しくウィーン・デビューしている。(「第2番」が先に作曲されているが、出版が遅れたため、後から作曲され先に出版された方が「第1番」となった。)

さて、ピアノ協奏曲第3番(Op.37)だが、前2作から僅か数年後の作品ながら、スケールの大きな曲の構成、ダイナミックな主題の展開、ロマンティックな抒情的旋律、絢爛たるピアニズムなど、モーツアルトやハイドンの“影”を感じさせる「第2番」、「第1番」と比べて大きく飛躍し、ベートーヴェンの力強い個性が大きく姿を現している。これは彼の交響曲における「第1番」・「第2番」と巨大なスケールの「第3番〈英雄〉」との関係と相似形である。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ (ハ短調 2/2拍子) 協奏曲風ソナタ形式。管弦楽が厳かな第1主題と優美かつ甘美な第2主題を呈示し終わると、力感あふれる独奏ピアノがおもむろに登場。華麗で技巧的なピアノとシンフォニックな管弦楽が絡み合う。

第2楽章 ラルゴ (ホ長調 3/8拍子) 3部形式。ピアノのソロで抒情的に開始される。管弦楽が奏する旋律は懐かしさにあふれ、それをピアノが美しく装飾する。

第3楽章 アレグロ (ハ短調 2/4拍子) ロンド形式。前の楽章とは対照的に、生き生きとしたロンド主題を先ずピアノが呈示。ハ短調という調性もあって、軽快でありながらもどこかほの暗い情感が支配している。



中庭に面した明るく落ち着いた
雰囲気の店内でイタリア料理を
お楽しみください

お電話でのご予約をおすすめします

リストランテ国立文流 TEL.042-571-5552

東京都国立市東 1-6-30 パティオマグノリア1F(JR 国立駅(南口)より徒歩3分)

◆営業時間：昼 11:30～14:30(L.O.) 夜 17:00～21:00(L.O.)

姉妹店 リストランテ高田馬場文流 TEL.03-3208-5447



ベートーヴェン：交響曲 第3番 変ホ長調 Op.55「エロイカ（英雄）」（1803）

ベートーヴェン以前のウィーン古典派の交響曲といえば、ハイドン（1732～1809）とモーツアルト（1756～1791）だが、形式あるいは楽器編成において試行錯誤を重ねて100曲以上の交響曲を残したハイドンが重要である。モーツアルトは40曲余の作品を書いているが、オペラや教会音楽、ピアノ協奏曲などがまず優先され、ハイドンの様な交響曲作家とはいえない。

ベートーヴェンにあっては「第1番」（1800年）から「第8番」（1812年）までを13年間に集中して作曲。「第9番」はそれから12年後の1824年だが、ハイドンによって確立された楽器編成やソナタ形式、4楽章構成を基本として守りつつも、それぞれが個性と革新に満ちた9曲の交響曲を作り上げた。

「演奏を止めてくれたら入場料を倍払ってやる！」…。「第3番」の初演の際、聴衆からこんな野次が浴びせられたというエピソードが伝えられているが、ハイドンやモーツアルトの交響曲あるいは「第1番」、「第2番」に耳馴染んだ聴衆にとっては、様々な新機軸にあふれ、演奏時間が50分を超えるこの「第3番」は“革命的音楽”であり度肝を抜かれたに違いない。

＜エロイカ（英雄）＞という副題はベートーヴェン自身が名付けているが、このあたりの経緯は本日のナヴィゲーター・小岩信治教授にお任せ申し上げたい。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ（変ホ長調 3/4拍子）ソナタ形式。

広大な楽章で全曲中の白眉。伝統的なソナタ形式だが、雄大で長い展開部とコーダに作曲家の革新と独創とが如何なく発揮されている。簡明かつ雄渾な第1主題に続いて第2主題が現れるが、楽章全体の主役はもっぱら第1主題で、これを素材とした大建築物の趣のある楽章。

第2楽章 葬送行進曲。アダージョ・アッサイ（ハ短調 2/4拍子）自由な3部形式。

悲しみに満ちた葬送行進曲が第2楽章におかれるのは珍しい。作曲当時（1803年），“英雄”ナポレオンは戦場で大活躍中であったが、ベートーヴェンが彼の死を予告したものである等々、諸説あるところである。

第3楽章 スケルツォ。アレグロ・ヴィヴィアーチエ（変ホ長調 3/4拍子）複合3部形式のスケルツォ。

冒頭は英雄の足取りが遠くから迫って来るようである。トリオは、狩りを彷彿とさせるホルンの3重奏が実際に印象的。

第4楽章 フィナーレ。アレグロ・モルト（変ホ長調 2/4拍子）自由な変奏曲形式。

交響曲の終曲が変奏曲であるのは極めて珍しい。2つの展開部を含む7つの変奏からなるが、第3変奏から現れる主題は、1801年作曲のバレー音楽『プロメテウスの創造物』の終曲から採られたもの。怒涛のように押し寄せる短い導入部に続いて弦楽器だけによる第1～2変奏の後、管が加わって『プロメテウス』の主題が姿を現す。長いコーダの後半はプレストに変わり、高揚のうちに堂々と曲を閉じる。

因みにベートーヴェンは「第3番」作曲の前年に、この『プロメテウス』の主題を用いてピアノ曲『創作主題による15の変奏曲とフーガ』（Op.35、1802年）を書いている。「エロイカ変奏曲」と一般によばれているが、作曲の順番としては交響曲第3番「エロイカ」は後から書かれているので、正確には「プロメテウス変奏曲」と称されるべきところ。ベートーヴェンはこの主題を用いて他にもピアノ曲を書いているが、余程、気に入っていたのであろう。



～生菓子も焼菓子も‘ぐにたち’がいっぱい詰まっています～

‘ぐにたち’らしい‘ぐにたち’だけのお菓子がここにはあります



洋菓子

国立 白十字



南口店 国立市中1-9-43 042(572)0416
富士見台店 国立市富士見台1-37-28 042(572)1718

東京藝大シンフォニーオーケストラ

Concertmistress	村山 由佳					
1st Violin	赤間さゆら 廣田 碧	大澤理菜子 今岡 秀輝	大光嘉理人 中添ゆきの	廣瀬奈津美	池田 聖香	山口真由夏
2nd Violin	柘植 彩音 布施 紀緒	堀 真亜菜 大倉 理佐	福田 紗瑛	飯田 拓斗	上園 綾奈	柳沢 開
Viola	有田 朋央	松岡百合音	原 香奈恵	美間 拓海	小室明佳里	児仁井かおり
Cello	蟹江 慶行	三谷 野絵	山崎 太陽	中西 圭祐	久保田佑里	
Double Bass	大槻 健	布施砂丘彦	岡本 文音	村田 詩織		
Flute	五十嵐冬馬	石原 恵奈				
Oboe	石井 智章	早川 萌子				
Clarinet	照沼 夢輝	福井 萌				
Bassoon	浦田 拳一	安井 悠陽				
Horn	鎌田 溪志	坂本英太郎	豊田 万紀	相原 結		
Trumpet	犬飼 伸紀	金子 美保	伊藤由理枝	鶴田 麻記		
Percussion	沓名 大地	竹内美乃莉	石川 大樹			

“コンサート・ホール” 一橋大学兼松講堂

一橋大学のシンボル的建物・兼松講堂(政府登録有形文化財)は、その響きの良さから、創建(1927年)以来、内外の代表的音楽家が多数来演、近年ではチェコフィルハーモニー(指揮アシュケナージ&ピアノ)やウィーンフィル・ベルリンフィルのトップ奏者たちが演奏するなど、コンサート・ホールとしても親しまれています。

今日まで、ピアニストでは、原智恵子、安川加寿子、田中希代子、ラドルプー、イングリット・ヘブラー、アシュケナージ、園田高弘、イングリット・フリッター、伊藤恵、野平一郎、菊地裕介、福間洸太朗、小菅優等々、往年の名演奏家や、現在第一線でご活躍の方々が多数来演しています。

2004年3月、社団法人・如水会(一橋大学の同窓会組織)による募金活動により77年ぶりに音響的にも配慮された大改修が行われ、自然な響きを持った本格的なコンサート・ホールとして蘇ったのを機に、翌2005年から「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」や一橋大学管弦楽団の演奏会が定期的に行われています。



1,700種類を超えるワインは最適な環境で、お手元に届く日を待っています

せきやビル地下の売り場が大きく変わりました



SAKE-BOUTIQUE
SEKIYA
Depuis 1910



国立せきやビル1F・B1F
☎042-576-3111(代表)
☎042-571-0001(店・直通)
営業時間／11:00～22:00

立川 JR 国立駅 新宿
銀行 南口 タリース
SEKIYA
国立せきやビル